

---

天理大学後援会主催 アカデミック講義  
『青年期と現代』

天理大学人間関係学科臨床心理専攻 高森淳一先生

---

### 青年期の課題：わたしとは何者か

青年期には大雑把にいって二つの心理学的な課題があります。まず一つめの課題としては、第二次性徴があります。身体の変化がものすごくあるということで、心理学では、青年期の人が直面する問題として、そういう身体的な変化をどうやって受けとめるかが問題になります。もちろん生理的変化自体は縄文人でも弥生人でも起こったわけで、そういうレベルで言えば現代も同じことですが、それをどう受け止めるか。男として、女として性を持った存在としてどう生きていくかということはまた別の問題ですね。

もう1つの課題というのは、社会的に自分は何者であるかを明らかにするということです。心理学ではアイデンティティという言い方をします。最近では一般にもよく使われる

ようになりました。社会に出てゆくのに際して、自分はこうゆう者ですよと自他に明示する身分証明書といったものを確かにすることです。証明といっても、どこかの卒業証書ということではなく、心理的な証明、確認のことです。具体的に言うと、大学生ならばどこかの専攻に行くか。四年生だったら卒論は何について書くか。これを自分で決めないといけないわけです。卒業後はどこに就職するか、何に自分を賭けていくか。何に価値をおくかということです。

就職をとっても、忙しくてもお金をいっぱいもらいたい、お金は沢山もらえないでも人のために役に立つような仕事に就きたい、忙しいよりも休みがいっぱいある方がよい、と人によって様々です。どれが良いということはなくて、その人がどういう生き方をする

か。それはその人でないと決められません。さらに、どういう人と結婚するか、自分で決めてゆかなければなりません。

## 現代の自由

江戸時代などは、農民がお武家さんになりたいと言ってもなれません。誰かと結婚するといってても村社会で、家と家との結婚ですから、見回しても対象の年齢、家との釣り合いを考えると、村の四、五人のうちから結婚するというように限られてきます。不自由ですが、ある意味において楽なのです。決められていて変えられない、逆に言うと決める手間というか、決断とそれに伴う自己責任がないのです。仕事も家が桶屋だったら自分も桶屋になる。それで何の不思議もない。

現代は自由になっています。結婚も家柄とかあまり言われない。国際結婚もできます。自由がものすごく広がったわけです。自由があって何でもできるという感覚です。一方何でもできるということは困ったことでもある。情報と一緒にです。情報が全然ないのも困るけれども、情報が膨大にあるというのも、結局どれを見ていいか分からぬのですから、無いのと同じような状況になってきます。全部見てから決める訳にいかない。世界中の男性を見てから結婚を決めようというわけにはいきません。4、5人の中から選ぶのだったら楽ですが、400人、正確には不特定多数の中から選ぶというのは大変です。この人がよいと思っても、さらに良い人が出てこないとも限らない。そういう苦労が現代的には非常に出てきています。

## 猶予期間としての青年期

エリクソンというアメリカの精神分析家、心理学者の人がいますが、1960年代にその事を取り上げまして青年期の特徴として、心理社会的モラトリアムということをいいまし

た。モラトリアムというのには聞き慣れないと思いますが、元々は経済用語なのです。銀行の取り付け騒ぎが起こる、あそこの銀行がつぶれそうだと

噂が流れると、つぶれる前に自分の預金を引き出そうと詰めかけるわけです。混乱が生じ、つぶれなくていい銀行もつぶれます。そういうことが大規模に起こると、社会的に混乱するということで、政府が介入し支払猶予令を出す。本当はお金を返さないといけないけれども、今は、支払いしなくていい、義務を果たさなくていい、猶予してあげましょうというのを公的に認める、それがモラトリアムです。それと似たようなもので、社会的、心理的な支払い義務を免除されているのが、青年期だということです。

大学生などというのは丁度その時期で大人がやらないといけない義務からフリーになっている。勉強はしないといけない。しかし、社会人としての義務ということは非常に免除されている。それは、社会自体が昔と違って非常に高度な技術を要求するようになったということで、職業人になるにしても一定の訓練を経ないといけません。こういう人生の時期、つまり青年期が確立してきたのは18世紀の西洋の社会です。見習い期間は、半人前でその時期は、少々の失敗は許される。いろいろ試してみる、試行錯誤の時代なんです。大学生は、バイトを熱心にいろいろやっています。コンビニに行きながら家庭教師をやってもいいし、土木作業をやってもいいということです。コンビニでも今日はAに行って、次の日は商売敵のBに行ってもいいわけです。学生はそういうことができます。



(講義中の高森先生)

あればあるほどダメだという感じになっている。新しい機械を知っていた新人も翌年新しい人が入ってきて、新しい機械が入ってくると、同じことが起きるのです。そういうふうに社会がどんどん変わるわけです。

江戸時代300年間の経済成長を今は、10年くらいでやっているといわれているわけですからものすごい変化です。

パソコンもそうです。モデルチェンジが早いのです。昔だったらライカの一流品みたいな素晴らしいカメラを一台持っていたら、10年自慢が出来たかもしれないのですが、今は最高のパソコンを買ったと自慢しても一年も経ったらそんなもの特別感心もされません。次々とさらに性能の良いものが安い値段で売り出されますから、半年くらいでたたき売り商品になってしまいます。それで買い手としてはどうなるかと言うと、もうちょっと買うのを待とうかと思うのです。もうちょっと待っていたら良いパソコンが安い値段で買えるのじゃないかななどと思う。こうなると仲々買う決心がつかないので。この状況は、今の青年と近いんです。いっぺんに社会に入ったからOKかというと、そうじゃないのです。入った枠、つまり社会の方が自分をとり残して先へ行ってしまいますから、また入り直さないといけない。ですから大変です。年輩の方も必要に迫られて、パソコンスクールへ行って勉強しています。50才になっても学校へ行かないといけない。そういう社会になってしまっているんです。

イニシエーションの通用する社会では一気に大人の社会に入れます。大人として素晴らしい資格が得られます。しかし、考えてみてください。有資格者だった世界が、半年でその資格が無効になり、更新して下さいとなるとしんどいです。一生懸命取って半年しか有効でないような資格はあまり取りたくないですね。

今青年が社会に入りにくい、入らない、就職しないという状況がありますが、このよう

に考えてみたら分かるでしょ。入ってみてもそんなに有益じゃないし、大企業に入つてもつぶれるかもしれないし、ここよりもっと良いところがあるのじゃないかという気持ちが出ると、どうしても頑張れないことがあります。ここしかないと言われると、嫌でも移れないから頑張るぞと思うけれども、もしかしたら他にもあるかもしれないという気持ちでおれば、なかなか頑張れないし、社会に入ろうという気持ちになれないのです。

今、社会に出るということが問題になっています。それは青年がふがいないとか、頼りないというよりは、1960年代から社会自体がどんどん変化していますから、その中へ入るということの意味が感じられないということです。

もう一つ大きな特徴としては、昔の見習いとか、書生とか、これも今はなくなりましたが、インターンなどは無給ですから、結婚しようと思っても、むずかしい。早く技術を身につけて一本立ちして頑張りたいという気持ちでやっていましたね。たぶん、大人から見てもいろんなことが制限されていたわけです。大人としての義務は、もちろんフリーになっていますが、権利も行使できないということがあったわけです。ところが今の大学生というのは権利の方は社会人と同じだけ享受していると思いませんか。二十五歳の社会人と二十歳の大学生で、二十五歳の社会人の出来ることで二十歳の大学生に出来ないことというのは非常に少ないだろうと思います。逆はあるでしょ。大学生は出来るけれども、二十五歳の社会人にはできることというのはものすごくありますから。今、社会に出るメリットが感じられないです。

大学生は、大型のローンを組むことは出来ないでしょうが、借金もできるし、クレジットカードも持てます。アルバイトで稼ぎます。卒業して就職をし、月給を貰う。手取りを見たらアルバイトの方が高かったということがよくあるんです。就職してお金を貰える

ところで青年期のない社会では、どうやつて子どもが大人になったかというと、これは、イニシエーションの儀式（加入儀礼）というのをやるわけです。たとえば、原始的社會ではある試練を課してパスすれば大人と認める。だから子どもから一挙に大人です。武家社會でいえば元服もそれに含めてよいでしょう。儀式によって名前も変わり、その日から、大人扱いになります。ここには移行期としての青年期はありません。

ところが先程お話したように、階段の踊り場というような形で、青年期というのが18世紀の西洋で成立して参ります。少なくとも職業人として、修行しておかないといけない。昔の単純な社会と違いますから、いきなり仕事が出来るというわけにいかないので、訓練をしないといけない。そういう準備期間としての青年期があって、この時代はいろいろ試行錯誤しても許される社会的な猶予期間なんです。いろんな事を経験して、そこで身についたものを元手に、有為な人間として社会に貢献するための時期というのが、大体1960年代頃までの青年期だと思うのです。

### 1960年代以降の青年期： 社会の流動性と関連して

ところが現代というのはまた少し様子が変わってきていまして、まず社会自体の変化が早いわけです。近年その傾向は著しさを増しています。原始的な社会がイニシエーションによって急に大人に成れたのはなぜかというと、変動のない社会だったからです。流動性のない社会、同じ時間がずっと流れている社会なのです。同じ神話がずっと反復している社会です。だから百年前に生きた人とその後の人でもあまり変わらない考え方、生活だったのです。ところが、現代というのは社会自体がものすごい速度で変化しているわけです。例えば、私は臨床心理学が専門ですから、病院などにも行っていたのですが、そこで看

護婦さんに聞くと、1960年の後半くらいから、新しい機械が医療現場にどんどん入ってくるようになつたのだそうです。それまで婦長さんは、経験も豊富で、尊敬される立場だったのですが、ある日出勤してみたら見慣れぬ機械が入っている。もちろん婦長さんは見たことがない。新しい機械を知っているのは誰かといえば、今年病院にやってきた学校を出たての人が一番詳しいのです。ということは婦長さんは「申し訳ないけど、この機械を教えて。」と逆に教えを乞わねばならず、立場が完全に逆転したというのです。昔の人であればあるほどダメだという感じになっている。新しい機械を知っていた新人も翌年新しい人が入ってきて、新しい機械が入ってくると、同じことが起きるのです。そういうふうに社会がどんどん変わるわけです。江戸時代300年間の経済成長を今は、10年くらいでやっているといわれているわけですからものすごい変化です。

パソコンなどでもそうです。モデルチェンジが早いのです。昔だったらライカの一品みたいな素晴らしいカメラを一台持っていたら、10年自慢が出来たかもしれないですが、今は最高のパソコンを買ったと自慢しても一年も経ったらそんなもの特別感心もされません。次々とさらに性能の良いものが安い値段で売り出されますから、半年くらいでたたき売り商品になってしまいます。それで買い手としてはどうなるかと言うと、もうちょっと買うのを待とうかと思うのです。もうちょっと待っていたら良いパソコンが安い値段で買えるのじゃないかなどと思う。こうなると仲々買う決心がつかないのです。この状況は、今の青年と近いんです。いっぺんに社会に入ったからOKかというと、そうじゃないのです。入った桟、つまり社会の方が自分をとり残して先へ先へ行ってしまいますから、また入り直さないといけない。ですから大変です。年輩の方も必要に迫られて、パソコンスクールへ行って勉強しています。50才

になっても学校へ行かないといけない。そういう社会になってきているんです。

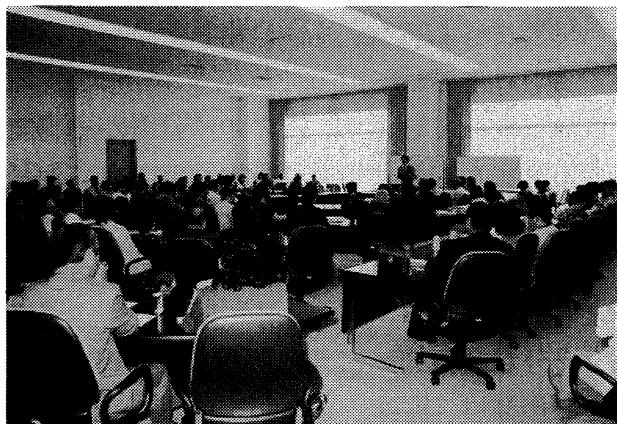
## 社会に出る意義や利点 が感じられない

イニシエーションの通用する社会では一気に大人の社会に入れます。大人として素晴らしい資格が得られます。しかし、考えてみてください。有資格者だった世界が、半年でその資格が無効になり、更新して下さいとなるとしんどいisho。一生懸命取って半年しか有効でないような資格はあまり取りたくないですね。

今、青年が社会に入りにくい、入らない、就職しないという状況がありますが、このように考えてみたら分かるでしょう。入ってみてもそんなに有益じゃないし、大企業に入ってもつぶれるかもしれないし、ここよりもっと良いところがあるのじゃないかという気持ちが出ると、どうしても頑張れないことがあります。ここしかないと言われると、嫌でも移れないから頑張るぞと思うけれども、もしかしたら他にもあるかもしれないという気持ちでおれば、なかなか頑張れないし、社会に入ろうという気持ちになれないのです。

今、社会に出るということが問題になっています。それは青年がふがいないとか、頼りないというよりは、1960年代から社会自体がどんどん変化していますから、その中へ入るということの意味が感じられないということです。

もう一つ大きな特徴としては、昔の見習いとか、書生とか、これも今はなくなりましたが、インターンなどは無給ですから、結婚しようと思ってもむずかしい。早く技術を身につけて一本立ちして頑張りたいという気持ちでやっていましたね、たぶん、大人から見ていろんなことが制限されていたわけです。大人としての義務からはフリーになっていますが、権利も行使できないということがあった



講義を受ける会員の皆さん

わけです。ところが今の大学生というのは権利の方は社会人と同じだけ享受していると思いませんか。二十五歳の社会人と二十歳の大学生で、二十五歳の社会人に出来ることで二十歳の大学生に出来ないことというのは非常に少ないだろうと思います。逆はあるでしょう。大学生は出来るけれども、二十五歳の社会人にはできることというのはものすごくありますから。今は、社会に出るメリットが感じられないのです。大学生は、大型のローンを組むことは出来ないでしょうが、借金もできるし、クレジットカードも持てます。アルバイトで稼ぎます。卒業して就職をし、月給を貰う。手取りを見たらアルバイトの方が高かったということがよくあるんです。就職してお金を貰えるからうれしいというふうにもならない。もちろんトータルを考えると、ボーナスとか保険とかありますが、近視眼的に見たら、つまり月々の手取りで見たら、自分で好きに使えるお金が減っているという感じなのです。社会の変化が社会に出ることを非常に難しくしていると思います。

## 自己選択=断念のむずかしさ

すでにお話ししたように現在の社会では、自由というのが拡大しましたから、自分で決めなければならない大変さを背負わざるを得なくなっています。昔の不自由な社会がいいとは言えませんし、変化しない社会がいいと

も思いませんけれども、自由というのを享受する限りにおいて選択の負担がかかってくる世界になっています。その中で自分が納得できる選択が非常に難しくなっています。何にでもなれるけれども、自分にだけはちょっとなれないという非常に厄介な社会になっています。

自分が社会的に何者であるかを明確にする心の作業は、実は皆さんが頭に思いうかべるいわゆる青年期だけでなく、かなりずっと後々まで続きます。心理学的には三十ぐらいまで青年期だと言えます。例えば少し前、「ヤンママ（ヤングママ）している」という言葉がはやりました。私は母親「である」という定義ではなく、子供を産んでも私はお母さんを一時的にやっているという感じなんです。

私は何々「である」ということを決めるには、実はあきらめるということが本質的に伴うのです。銀行員になるのだったら、メーカーには勤められないということです。Aさんと結婚するのだったらBさんと関係を切るという世界、あれかこれかの選択を迫られるわけです。今的人は何でも出来ると考えてきていますから、あれもこれもという感覚です。社会に出させる父親からの圧力等も減っていますし、ある種の選択をし、他を断念するということが難しくなってきています。

### 個性化への欲求と 本質部分での画一化

自由になったと言われ、一見個人とか個性などと声高にいわれ、バリエーションがあるように思われていますけれども、つまるところ管理社会であり、情報化社会ですから、根本のところでは画一化しているのです。テレビを考えてもらうとよくわかると思います。テレビのチャンネルは、いくらでも自分の意志で変えられると思っていますけれども、そういう意味では、どの番組を見るのも自由だと思いますけれども、根本においては画一な

んです。自分で番組を創るのでなくして、出来合いが向こうから来るのをただ受けとっているだけなのですから。今の時代は、根本的にはテレビ的だと思います。ですから自分は何かが違う、他人と違う自分になりたいという、自己実現というものがもてはやされます。もてはやされるのには、こういう欲求が皆の中に高まっているということと同時に、逆説的ですが、それが容易には実現しないせいもあるのです。

現代は、本物らしいニセモノには容易になります。そういう意味で、本当の自己実現がしにくい時代だと思います。目先においてはバリエーションのある世界ですが根本においては画一化しているのです。インターネットでは、何種類かから好きな色やデザインを選んでもらってあなたのオリジナルの時計を創りますとか、世界でただ一点だけのあなたの商品を作りますとか、個性的で、他人と違うあなたの特徴というのをものすごく売り出すわけです。これはかけあわせる既存選択肢をふやしただけですから、よく考えると本質的に個性的ではないでしょう。逆にいえば、同じ物をもっていると、人格としての個性が希薄化する不安をもっていると考えることができますね。青年は変わった格好をよくしますが、変わってると思うのは大人からみてであって、同世代集団内での画一性をもった流行にすぎないわけです。

### 平凡恐怖と理想の喪失

現代は、自分の思うようになれそうでなれない社会になっていて、それを抱えて青年は実は苦しんでいる。大人になりたくない、踊り場でずっと踊っていたい。しかし、もう少し考えますと、そもそも大人になるということが意味不明になっているのがわかります。どこからが大人か。大人になったというのはどういうことなのかが分らない。大人になるとお金が好きに使えるとか、性的な関係が

持てるとか。そんなのは全然指標にならないんです。ですから大人になりたくないという言い方では語れないと思います。これは、いうなれば平凡になりたくないという心理だと思います。他の人と同じことをするのが嫌だ、特殊な存在になりたい、そういう感じです。青年からみた既存のいわゆる大人たちは、凡庸な没個性的存在として映っているのです。

それは、ある意味では青年が理想というものを失っているからだとも思うのです。立派な人になりたいとか、自分を超えた存在に対するあこがれということが無いんです。主義、理想というものが損失した社会になっていますから、社会のために貢献したいという人も減っています。青年はどうしていいか分からぬんです。その結果、どういうふうになるかというと、手近なところで自分の欲求を満たそうということになるのです。以前は社会に役立つことで自分が有益な人間であるということが確認できたのですけれども、今は何かに奉仕したいと思っても、自分を超える大きなものが無いわけです。マスコミもそんなのはインチキやとぶち壊すわけです。人は、目標とするものが無いと生きていくのが実はしんどいもので、社会的理理想がなく、尊敬できる人もないと勢い手近な理想で済ませます。旨い物を食べたい、ブランド品を着たいとか、良い車に乗りたいとかいう形で自己欲求を満たすという形になっていっているのだろうと思います。そのレベルで、ひとつちょっと差をつけたい。

今はいろんな意味でボーダーレスの社会になっています。今日は、心理学的にみて青年と大人のボーダー（境界）が判然としなくなったことをお話ししたのですが、国境なんかでもそうですね。大きなソビエト連邦という、今から思うとあれは何だったんだろうと思います。大国の理想があったはずなのに、中はボロボロでした。ソ連に限らずいろんな国が分裂して、ボーダーレスになって、紛争

が起こったりしました。自由になって独立するということは良いんだけども、逆に紛争が起こる。それと同じように心の中でも自由が拡大しますと、それに伴って解決しなければならない課題というのも非常に増えてきます。

### 青年理解のために

青年の不可解さということは、昔から言われていることです。メソポタミアのくさび形文字でも、最近の若いやつらはなっとらん、ということが書いてありますし、16世紀のロックという教養の高い学者でも、今の青年の心理は理解出来ないと書いています。そしてみると、本質的に年輩者には青年を理解できないところがあるのではないかと思います。

それはつまり、若いということ自体に内在する特性からくるのです。若いということは、より長く生きる、つまり私の知らない未来を生きるのです。そしてそれに必要な多くの可能性を内にもっているはずです。わたしの知らない社会を生きるには、私の知らない能力、要因を持っていないと生きていけない。今の社会は、どんどん変わっていきますから、今の標準から見て、これはおかしいと思うようなことも、実は将来に向けての何か大きな一歩じゃないかと考えると、すべて頭ごなしにダメだと決めつけることはできないと思います。若い人に接するたびに、そういうことを念頭に置いておくだけでも、見方が多様になって余裕が出来るんじゃないかという気がします。

ご静聴ありがとうございました。

（これは後援会が主催したアカデミック講義の要約したものである。）